

至誠の人 吉田松陰 (一)

講談師 一龍斎貞花

大河ドラマ「花燃ゆ」の視聴率がよくない。大奥や、時代を動かした篤姫。はじめドンパチ、後半新島襄の妻となつた八重と違って、大きな動き、働きのない文。松陰という主力商品がありながら、付属品を売り込もうとして失敗という構図。営業政策の参考にされてはいかが。

「貴方たちは、志のために死ぬことが出来るか」

「君の志は、なんですか」

松下村塾は、藩校明倫館と異り、身分も年令も構わない。多くは十五歳から二十歳の武士の子弟とはいえ、半農半武士どころか、一日中畠を耕す、名

だけの下級武士の倅がほとんど。下は九歳から上は三十六歳まで、農民、町人魚屋の倅、僧侶まで。一番弟子久坂玄端とは十歳差。松陰自身、わずか食

禄二十六石の下級武士杉家の二男として文政十三年(一八三〇)八月四日誕生。萩城下や、杉家の近くに住んでいる者が、総勢九〇数人の内の三割。

松木村は、ご城下はずれのひなびた村。しかしこの村から多くの人材を輩出。

手を結んだ薩摩の下加治町も、七十数軒という狭い土地から、西郷隆盛、従道、大久保利通、伊地知正治、大山巖、東郷平八郎、山本権兵衛という人物が出ています。人材を育てた郷中教

育があり、私塾松下村塾とともに、人を育てることがいかに重要であるかという事です。

玉本文之進の松下村塾

父百合之助は、農作業のかたわら常に読書をおこたらず、四書五経、詩など兄梅太郎とともに、寅次郎の素説はほとんど畑で教え、夜は米つき、藁仕事をしながら楠木正成や、児島高德など天皇の忠臣の物語を読み、叔父である山鹿流兵学師範の吉田家(五十七石)に養子に行き、六歳の時叔父が亡くなり、山鹿流兵学を極め松下村塾を開いている叔父玉本文之進(四十石)の元で厳しく指導を受けます。

顔に虫が止つたので手で払うと、平手打ち。「顔がかゆいからとは己のため、一時たりとも己の欲のために生きることを許さん、己を捨てよ、公のため生きよ」勉学態度が悪いと、いつて鞭で叩かれ、庭に放り出されるは、背中に机をしばりつけられたり、夜外で立たされるなど、こうした教えが、わずか十一歳で「武教全書」戦法篇を、主君毛利敬親に講じて認められ、法を犯したあとも、「この男使える」「国のために働きたい」という若者を評価。この殿様でなかったら、松陰は塾を開くことも、牢から出ることも出来なかつたであろうし、命さえも分らない。父も兄も切腹せざるを得なかつたかもしれません。

下々の声を聞く主君であればこそ、松陰門下生によって、幕末に長州が大きなウエートをしめたのです。

重役、側近だけでなく、一般社員の意見を聞くことが大切と申せましょう。

「勤儉」「剛直」直情とも思えるまっすぐな生き方は、文之進の指導によるところが大きく、異国の船がひんぱんに出没しはじめると、海防、海の守りの研究に打ちこみ、二十二歳で江戸へ遊学、生涯の師佐久間象山の弟子となり、攘夷を教しえられます。寅次郎と小林虎三郎を象山門下の二虎と称せられ、

「天下に事を成すは寅次郎であり、我が子の教育を托すべきは虎三郎である」と書いています。小林虎三郎は「米百俵」の主人公、救援米を売って学校を建て、人材育成の大切さを説いた人物である。そして勝海舟も象山の弟子、幕府・薩長にとらわれず国のために西郷隆盛と話し合い、江戸の町を戦火から守った人物。

一歳年上の儒官小田村伊之助と気心が合い、時勢を語り合い、翌年肥後藩

士宮部鼎蔵と東北視察の約束のため、許可が降りるのに半年以上も掛るところから、小田村の止めるのもきかず脱藩して東北へ。脱藩の罪で謹慎。父が保護する条件で入牢をまぬがれ、この頃から松陰を名乗り、十五歳の妹寿を伊之助に嫁がせ、再び江戸への遊学を許され、江戸へ出てわずか六カ月後の嘉永六年六月三日、浦賀にペリーの黒船が来航するや、

「敵を知り、己れを知れば百戦危うからず」と孫子の兵法。国禁を犯して黒船に乗り込み、密航を試みるも追い返えされ、自首して野山獄へ入れられ囚人を相手に孟子を講じ、ここで美人の高須久子との出会いがありました。

松下村塾開講

実家で塾居の身となり、自分が学んだ叔父の塾名を受け継ぎ松下村塾開塾。塾居ですから外へ出ることも許されず、三畳間ではじめは身内から、やがて身分の上下なく、どんどん入塾し九十名からの弟子を指導。しかし「僕は先生ではなく、共に学びましょう」と。

『思うように抗え、古い教えに縛られるな、諸君狂いたまえ』

教しえるというより、議論をたたかわし、皆自分の考えを遠慮なく述べ、共に学び、ともに育つ。

塾生の中に混じっているのが、初めて訪れた人は、誰かが先生か見分けがつかないほど、一人一人の個性を重んじ、長所を見つけて伸ばそうとした。

「なぜ学ぶのか」

「君はナニを志しますか」と、目的意識を重視した教育。

女子教育にも熱心で、子どもは母親から大きな影響を受けるのだから、娘時代から教養を持つべきだという「女大学」、「女は生涯貞節を守れ」。今なら、なにを言っているんだ、古いよと言われかねませんが、嫁いだ姉や、親戚の女性達も講義を受けました。その一番が、大河ドラマの主人公、文といえましょう。

母のお瀧は、明るいプラス思考の性格で、当時としては珍しい毎日風呂に入り、慈愛に満ちた女性。

松陰が罪を受けても父をはじめ受け入れ理解する暖い家族でした。

松陰が継いだ吉田家が師範をつとめる山鹿流兵学は、戦略、戦術のみでなく武士の在り方を説く道徳的な面も指導。

大石内蔵助も山鹿素行の弟子でした。大石が主君の仇討ち。長州は、関ヶ原の戦いに西軍に加担したため、中国一円八カ国からわずか二カ国、一二〇万石から三六万石と四分の一近くに滅封された、徳川幕府に対する怨念が幕末の行動となったともいえましょう。

「志を持った在野の人々の力によって日本に変革を起さねばならぬ」と、弟子を指導した松陰が、処刑されるお話は次回連続に申し上げます。ポポン